

2009

[不動冨・カモシカの路]



秋本治

[キラタチネット]

2009/05/24

ドキュメンタリー [2008年4月5日]

—不動冨・カモシカの路—

その1

「不動冨」。それは、なんとも霊的エネルギーを発するような不思議な響きと、研ぎ澄ました力が漂うような文字ではある。かつての駄賃つけの馬道「霧立越」をトレッキングとして活用するようになってから地図にこの文字をよく目にするようになった。

国土地理院の二万五千分の一図で「胡麻山」のページを開くと、南側に標高1661mの扇山が等高線の長楕円の輪が緩やかに重なっているのが目につく。そこからさらに長楕円形の輪は、東に向かって連なっており、その先、東に続く尾根の先に「不動冨」と記されているのだ。

この「不動冨」を特に強く意識するようになったのは、2008年の2月27日からである。この日、メーリングリスト「九州の山と自然」をテーマに運営している[kiritachi.net]に宮崎の白池さんから次のような投稿が寄せられた。

「地質調査している白池といいます。椎葉村の不動冨山に登山された方は小路さんでしたか。扇山からの尾根伝いの路について教えてください。路はありますか。藪こぎでしょうか。1/5万の鞍岡の地質図幅を書くことになっていて、現在調査をしています。不動冨山には石灰岩が分布していると予想され、チャートも予想されます。それらの分布域を正確に記載するには行くしかないかなと思案中です。藪こぎの状態だったら、自信がないので、あきらめます。」一と。

すると間髪を入れずに熊本の小路さんから「白池さん、不動冨山（フトザエヤマ）は昨年12月に登りました。扇山までの尾根道を調査する為でしたが尾根の先までは行きませんでしたので推測ですが登り初めの数箇所に赤テープがありました。平成15年11月に所属していた山の会のパーティが扇山から縦走していますがその時の記録には「過去に何人かは歩いているだろうとの予測に反して苦戦となる。」と報告しています。藪はそんなに深くはなく普通に手でよけて立って歩けるくらいでしたが先のほうは分かりません。時期は秋から初春のほうが見通しも良く楽に歩けるかと思います。ここはいずれ歩いてみたいところです。行かれるときは教えてください。添付地図の赤は車（一部歩き）で移動、緑は登り、青が下りのルートです。」一と。小路さんは、ほぼ毎週のように休日には山歩きをされている山の主のような方で、いつもGPSで地図上に歩いたルートを記録されている。こうした問い合わせには実に貴重な情報を提供されるのだ。

続いて、熊本の江口さんからメールが入った。「小路さん、江口です。以前、不動冨山の呼び名を「フトザエ」というのか、という質問が黒木さんにあっていましたが、僅かばかりの知ったかぶりをします。小路さんの写真でわかるように、切り立った滝の地形ということがよくわかります。一般にこのような地形を「フト・フド」と呼んでいたようです。それが修験の滝修行場とも重なって不動明王の「フド」となり、一番多いのは「不動ノ滝」がそれです。つぎに切り立った台地の峠地形を「不土野越」いわゆる「不土野峠」ですね。「ザエ」は「サエ」で以前も話題になった境界というか最奥の高地をさす呼び名ですね。神楽唄の「サエは雪、コウマはあられ、里は糧、なにとて雲にもへだてがあるか」だったと

思うんですが。面白いのは、財木に以前、「四盲七畑」という地名が地形図に記入されていて、探険に行きましたら、簡単に解りました。正しい呼び方は「シモシチバタ」で「しも七さん」という人の畑からきたのだろうと地元のかたに教えていただきました。陸測のときも案内人から聞くんでしょけど案内名づける本人が面白がって付けた地名も多いことと思いますね。」江口さんは九州における民俗研究の第一人者で、彼のように情報をもっている人は先ずいないと思われたが、不遇にもこのあと2カ月あまりで突然に有明の海で帰らぬ人となってしまった。

さらに小路さんは、「江口さん、ありがとうございます。皆さんのメールをデュアルディスプレイ（画面2枚）の片隅で読みながら別の画面で仕事しています。黒木さん、江口さんはさながら生き字引、歩く辞書と言ったところでしょうか。隣で、20mも離れていない所に居ながらメールでやり取りするのも不思議なことです。重宝しています。そういえば皆さんと白鳥山、とき糺時雨岳へ登ったときも「時雨」は「シクレ」から来ているとの話を伺いましたがもう意味を忘れていました。地図の測量のときに地元民からの聞き間違いや当て字で地名、山名を記録したことは良く聞きます。

> 不動冴山へは内の八重木の扇山登山口から尾根に上がり、尾根伝いに不動冴山に行く方がたやすいのではと素人考えです。

白池さん、確かに扇山の分岐からは200mほどの降りになりますので少しは楽かと思えます。以下は先ほどの記録からの抜粋です。

- > (扇山から) 引き返して縦走路の取りつきで昼食とする。昼食後、いよいよ
- > 縦走の開始。過去に何人かは歩いているだろうとの予測に反して踏み跡はなく、
- > 第一歩から苦戦となる。この山域は鹿も少ないらしく、獣道らしいものもほとんど無い。こうなれば磁石を頼りにこちらも獣化して突進あるのみ。只ひたすらスズ竹の藪をこぐ。苦痛でもあるが、快感でもある。
- > 地形図では、ゆるやかなアップダウンに読めるが、どうしてどうして。
- > 岩峰混じりの尾根はかなり変化が激しい。日没が早い今の季節、午後3時を
- > メドに縦走を止める予定のところ、全コースの約半分、1,316Mと1,283Mの鞍部
- > 附近で、杉林伐採中の場所に出る。これを幸いにワイヤーロープに沿って下山
- > する。松木林道に出てひと安心。

この「コースの半分」と言うのは不動冴山から内の八重までの下山も含まれていますので1日コースかと思えます。皆さんの山慣れの状況が分かりませんが。黒木さん、今度内の八重からの入り口を教えてください。大晦日には雪が多くそれらしき入り口は分かりませんでした。

- > まだ地図には書き込みがされていませんが、住友林業（株）が自社の
- > 林業経営のため作業路を開設しています。
- > 胡麻山林道から少し行って、作業路を内の八重まで開設しています。
- > 今日数人伐採搬出の人たちが山に入っていました。

秋本さん、黒木さん、またこちらの尾根筋山歩きのイベントも考えてみてください。」

このようにメーリングリストでは、その日のうちに不動冴ルートの子歩きイベントの提案となったのである。翌28日になってもさらに不動冴論議が続くのでこの項に関する部分を抜粋して投稿を並べてみることにする。

[次ページへ続く](#)